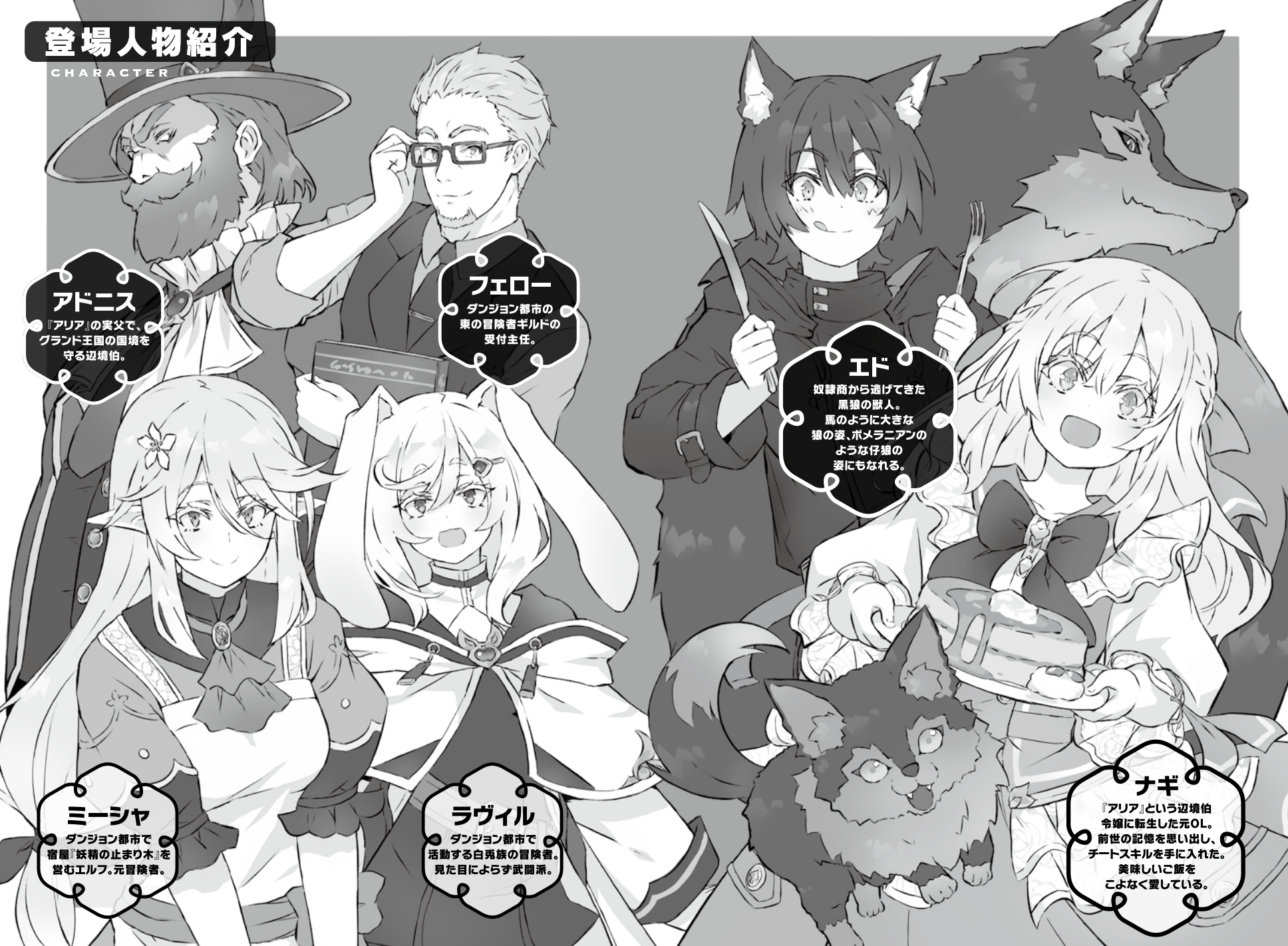
異世界転生令嬢、出奔する

登場人物紹介

CHARACTER



アドニス
『アリア』の実父で、グランド王国の国境を守る辺境伯。

フェロー
ダンジョン都市の東の冒険者ギルドの受付主任。

エド
奴隷商から逃げてきた黒狼の獣人。
馬のように大きな狼の姿、ポメラニアンのような仔狼の姿にもなれる。

ミーシャ
ダンジョン都市で宿屋『妖精の止まり木』を営むエルフ。元冒険者。

ラヴィル
ダンジョン都市で活動する白兎族の冒険者。
見た目によらず武闘派。

ナギ
『アリア』という辺境伯令嬢に転生した元OL。
前世の記憶を思い出し、チートスキルを手に入れた。
美味しいご飯をこよなく愛している。

第一章　異世界転生したようです

（さむい）

ぼんやりと意識が浮上して、まず感じたのは凍えそうな、ひどい悪寒だった。

ガタガタと身体が震えているのが分かる。頭も痛いし、喉はトゲが刺さっているかのような鋭い痛みがある。これは、あれか。扁桃腺が腫れたな、とぼんやりと思った。

喉が弱くて、幼い頃からよく腫らしては高熱を出して数日寝込んだものだ。

大人になってからは罹患していたこともあり、こんな風に体調を崩すのは久しぶりだった。

「けほ……っ」

小さく咳き込み、少しでも楽な体勢をとろうと身じろぎして――違和感に気付く。

「……ちい、さい……？」

顔の横に力なく投げ出されている自分の手が、妙に幼い。まるで子供の手だ。

だが、子供らしく、ふくふくした様子はない。肌は薄汚れ、指先は乾燥し、荒れている。

きゅっと指を握りしめてみると、ひりついた。指先の皮膚が裂けて血が滲んでいる。

夢ではない。これは、自分の手だ。

（なんだろう、これ……？）

呆然とする。痛む頭を片手で押さえながら、どうにか自由に動く目を忙しなくあたりへ向ける。

しばらくすると、灯りもない薄暗い室内に目が慣れてうっすらと周囲の様子が見えてきた。

狭い部屋だ。四畳半ほどの広さで、寝かされているのは木製のシンプルなベッド。ごわごわとした肌触りのシーツでスプリングも利いておらず、寝心地は最悪だ。少ないが、他に家具も幾つか。

学生時代から社会人になった今もずっと過ごしている居心地の良いマンションの自室ではない。

なんとも殺風景な場所で寝かされている状況に戸惑った。

（どこなんだろう、ここ……。もしかして、記憶喪失？）

恐怖にぶるりと肩が震える。

落ち着け、思い出せ。深呼吸を繰り返し、自分のことを思い出そうとする。

名前は、渚。工藤渚。年齢は二十七歳。都内で中小企業に勤めながら一人暮らしをしている、独身女性。趣味は読書にゲーム、映画鑑賞。休日に少し凝った料理を作って美味しく食べることとお酒を呑むことが楽しみな、平凡な人間。家族は母と兄がいて、今のところ恋人はいない。

（うん、大丈夫。記憶はある。ちゃんと覚えている。一番最近の記憶はなんだっけ……？）

つきん、とこめかみが痛む。嫌な予感。怖いな、と思う。だけど、何も知らないでいるほうが、もっと怖い。きゅっと両手を握りしめて、記憶の片鱗を探る。

（ああ、そうだ。あの日、私はいつもよりお酒を呑んでいて、それで――）

ずっと携わっていた大きな仕事を終えたところだった。関わったチームで集まり、打ち上げをした。お店の食事はどれも当たりで、雰囲気も良くお酒が進んだ。とても楽しかった。

翌日から三連休なのもあり、皆で盛り上がって、大好きなお酒を少しばかり呑みすぎていた。

『危ないですよ、渚センパイ』

後輩にそう諫められたが、「平気平気」とへらりと笑い、階段を下りようと一歩踏み出した――と同時に、地面が大きく揺れた。地震だったと、思う。

足を踏み外して、階段を転がり落ちたのが最後の記憶だ。背中や腰を打ちつけ、ガツンと強く後頭部に衝撃を受けたのを最後に、意識が途絶えている。

すぐ背後に立っていた後輩が青褪めた顔で片手を伸ばす姿などを走馬灯のように思い出す。

（あれ、じゃあ私は死んだのかな……？　小さな手の持ち主になっているのは、まさか……）

ぐるぐると考え込んでいる間に、また熱が上がったのか。

小さくて弱々しい身体はすぐに音を上げ、意識は闇にとろりと溶けていく。

（いや、説明……誰か、ちゃんと説明して！）

再びの眠りに落ちる前にそう強く願ったおかげか。夢の中で、渚はとある存在との邂逅を思い出していた。

『――あれ、君まだ寿命が残っているね？』

唐突に、不思議そうに問いかけられた。

寿命？　渚が小首を傾げると、目の前に立っている人が何かの書類を眺めながら、ため息を吐く。

『うっかり者がまだ生きていた魂を連れて来てしまったようだね。申し訳ない』
その人は男のようにも女のようにも見える、不思議な存在だった。年齢も不詳。一見すると年若い青年のようだが、老成した空気も纏っている。なんとも印象の定まらない相手だったが、不思議と悪人には思えなかった。
珍しい全身白いスーツ姿のその人は、困ったようにこちらを見ている。……ということは、寿命が残っていた魂の持ち主とは渚のことで。
『……え、ここ、もしかして、天国……？』
呆然と呟いた。
白い壁に囲まれた、ドアのない真四角の部屋の中央。真っ白いシーツが敷かれたベッドに腰を下ろしている。なぜか天井だけはぽっかりと開いており、透き通った青空が広がる不思議空間。
驚きも、過ぎるとかえって冷静になるらしい。
『……そして、貴方は天使か、何か……？』
神さま、とは訊ねなかった。なんとなくこの白スーツの人には、最高位の高貴の存在というより、中間管理職のような苦労人の気配を感じたからだ。
果たして予想は当たっていたようで、その人は軽く顎を引いてみせた。
『うーん、まあ似たようなものかな。僕は魂を管理している管理者だ。そして、ここは天国ではないけれど、魂の通り道のような空間と思ってくれていい』
柔らかな声は耳に心地よい。

パニックに陥らないのは、静謐な空気とこの存在――管理者の雰囲気によるものかもしれない。
『工藤渚さん？　先程も伝えたとおり、貴方の魂は、本来はまだこちらに来る予定ではなかった。完全にうちのミスだ。申し訳ない』
管理者が頭を下げてくる。渚は慌てて、首を振った。
『あの、それは理解しました。謝罪は受け入れますので頭を上げてください。起こったことは仕方ないですし、その、魂とやらをちゃんと戻して頂けるなら問題ないです』
酔っ払って階段から落下、なんて死因、恥ずかしすぎる。多少の地震には慣れた都民なのだ。あそこまで酔っ払っていなければ、手すりにしがみつくなりして、体勢を整えることもできたはず。
渚が足を踏み外さなければ、お迎えの天使か死神かは分からないが、彼らもミスを起こさなかっただろうし。だが、管理者はきっぱりと首を横に振った。
『申し訳ないのだが、一度迎えた魂はもう元には戻せない。何より、貴方の身体は既に火葬されている。時間を巻き戻すことはできないから、生き返らせることは無理なんだ』
『え……』
優しく突き放されて、渚は言葉をなくす。
（死んだんだ、私……）
じわじわとその事実が胸のうちを絶望に染め上げていく。死にたくなんて、なかった。
それなりに楽しく生きていたし、まだやりたいこともたくさんある。それをこんな風に突然取り上げられるなんて。

気付いたら、はらはらと涙がこぼれ落ちていた。白いワンピースに染みが広がる。そういえば、これは渚のお気に入りだった服だ。母が棺に入れてくれたのか。いや、意外と気が利く兄かもしれない。

年末に帰省してから会っていなかった二人。家族のことを思い出して、涙が更に膨れ上がる。

こんなに早く死んでしまうなんて、思いもしなかった。

母子家庭で苦労して育ててくれた家族に、まだなんの恩も返せていない。母と兄にお礼ひとつ伝えることもできないままだ。連休に遊ぶ約束をしていた十年来の友人にも謝りたかった。

目の前で仕事仲間が死んでトラウマになっていないか、後輩のことも心配だ。

色んな感情がごちゃまぜになって、怒りとも悲しみともつかない気持ちのまま涙を流し続けた。

どのくらいの時間が経ったのか。ようやく落ち着きを取り戻した渚に、管理者がそっとガラスのコップを差し出した。

『ありがとう、ございます……』

お礼を言って受け取った。思うところはあるが、この人に当たっても仕方ない。

冷たい水を口に含む。喉を滑り落ちる水はとても美味しかった。柔らかな軟水。ほんのりと甘い。

魂だけの存在なはずなのに、味覚を感じるのが不思議で、ちょっとだけ笑ってしまう。

『落ち着いた？』

『見苦しいところをお見せしました……』

思い切り泣いたら、スッキリした。何より、もう身体がないのなら、どうしようもない。

悟りを開いたような心地で沙汰を待つ渚を、魂の管理者は面白そうに見つめる。

『いや、貴方はまだ理性的な方だよ。怒って喚いて殴りかかってくる魂もいたから』

『そうなんですか……』

『うん。それでね、貴方の今後についてだけど。地球とは別の世界に転生してもらうことにします』

にこりと笑って告げられた言葉に、渚は瞠目する。

『それはあの、流行りの……？』

『うん、異世界転生だね』

『わぁ……』

それはまた、ファンタジー好きの兄が泣いて喜びそうな展開だ。

『地球に転生はダメなんですか……？』

『うん、本来の寿命分の年数を別の世界できちんと消費してから、その次の転生で元の世界の輪廻に戻れるようになるんだ。だから、申し訳ないけれど、しばらく違う世界で生きてもらうことになる』

それは決定事項のようで、諦めるしかない。だけど、異世界か。

（恐怖しか感じないんですが……）

渚が冴えない顔色でいると、管理者は不思議そうに首を傾げた。

『あれ、異世界転生、嬉しくない？』

『嬉しくないです。現代日本で甘やかされた身では生き残れる自信が全くないです』

きっぱりと断言する。

『物語の中の異世界ですと、中世ヨーロッパ風……まあ実際は近世あたりの時代が多いんでしょうけれど、そんな感じです？』
『うん、そうだね。剣と魔法のファンタジー世界です』
『もしかして魔物とかもいたりします？』
『いるね。あとは隣り合った小国と領土を巡ってたまに小競り合いをしていたりとか？』
可愛く告げても騙されない。それ、戦争じゃないですか。
『そんなの絶対無理です。死ぬ、すぐ死ぬ、絶対死ぬ』
頭を抱えて渚が唸って見せると、管理者はぎょっとした。慌てた様子で言い募る。
『えっえっ、なんで？　大丈夫だよ、ちゃんと転生特典つけてあげるから！　先程貴方が飲んだ神水で魔法は使えるようになったし、ギフトとして便利な能力も与える予定だし。大丈夫、きっと楽しい！』
『無理です。私、別に潔癖症ではないですけど、不潔な環境で過ごせる自信ないですし』
『快適に過ごせる魔法を授けるよ。生活魔法が使えると、清潔さも保つことができるからね』
『今更、異世界の言葉を覚えられる自信もないし……』
『異世界言語と鑑定能力は転生者お約束ギフトだよ！』
『魔物相手に戦う力があるとは思えません』
『各種耐性に魔力量もたくさん、身体能力向上もおまけします！』
『転生ってことは、赤ちゃんの時から前世の記憶があるんです？　それはしんどそうな……』

『十歳の誕生日に前世の記憶を思い出すように設定しておくよ』
『他に何があるといいかな……？』
悩む渚を管理者が呆れたように見やる。
『記憶を取り戻してから、自分で欲しい能力を選んだら良いよ。貴方の本来の寿命百年分として、百ポイントを進呈するから。ポイント分の有用なスキル能力を選べるよ』
『え、私の寿命あと百年もあったの……』
ギネス級のご長寿じゃないですか。
（それで、管理者さんもこんなに融通を利かせてくれているのかな？）
『まあ、そんなとこ？』
『ナチュラルに思考を読まないでください……』
（あれ、思考を読めるのなら、先程の茶番にはわざと付き合ってくれたのかな？）
『それもあるけど、どうせなら新天地で楽しく生きてほしいし？』
『……ありがとうございます。なるべく楽しく百年生きてみようと思います』
渚がどうにか笑って見せると、管理者も嬉しそうに頷いた。
『記憶が戻ったら、自分自身を鑑定するといいよ。そこでスキルポイントを割り振れば、便利な能力を得られるから』
『分かりました。色々ありがとうございました』
真っ白な光に包まれ、意識が閉ざされていく。これから、生まれ変わるのか。

家族や友人にさよならを呟く渚の耳朶を、優しい声音が震わせた。
『良い、異世界生活を』
それが、工藤渚の魂の、最期の記憶。

パタンとドアが閉じる音がして、目が覚めた。
誰かが、この殺風景な部屋から出ていった音だ。少し眠ったおかげか、先程よりは多少は気分がマシだった。ゆるゆると息を吐き、ぼんやりとあたりを窺う。
「あ、水……」
テーブルの上に水差しとグラスが並んでいる。その横には小さなトレイ。スープとスプーンが置かれている。部屋を出ていったのは、これを運んでくれた配膳係のメイドだろう。
（齢十の令嬢が病気だっていうのに、最低限の施しだけで、あとは放置かぁ……）
眠っている間に思い出した記憶は、転生時の管理者からの説明だけではなかった。
この身体の持ち主――アリア・エランダル辺境伯令嬢の記憶。生まれてから十歳までの彼女の人生を、渚は夢の中で復習していた。
アリアの実母は彼女が五つの時に病で亡くなっている。エランダル辺境伯家は母の生家だ。その領地はここグランド王国と隣国の境にあり、国境線を守る、戦略的にも重要な拠点である。
武に優れた一族だが、薄命な者が多い家系でもある。アリアの祖父は領地の南側に広がる大森林から溢れた魔物の討伐で命を落としたし、何人ものご先祖さまも隣国との戦で果てたと聞いた。

夫を亡くした祖母は後継のため、一人娘であった母に婿をあてがった。
それがアリアの父、アドニスだ。エランダル辺境伯家の傍流である騎士爵の息子で、辺境軍を率いる団長だった。祖父は武に優れた彼を気に入っており、いずれ娘の婿にと考えていたらしい。
父が婿養子に入ると、安心したのか祖母も病で亡くなった。そして、後ろ盾を亡くした母を、父は蔑ろにした。妻が乳飲み子を抱えているのに、愛人とその娘を屋敷に入れたのだ。呆れたことに、母と結婚する前から関係のある愛人だった。
エランダル家への婿入りを狙っていた父は、二人の存在を隠して母と婚姻を結んだ。母が妊娠、出産している間にエランダル家を掌握した父は、その後は用無しとばかりに母娘を別邸へ追いやった。乳母を一人とメイドを一人あてがっただけで、放置したのだ。エランダル家の本来の主であるはずの母は貶められ、心と身体を弱らせた。
アリアの母は元々線の細い穏やかな女性だった。ゆっくりと命の灯火を消していった彼女を、弱い女だとは思わない。父がどうしようもないクズだったのだ。
さすがの父も、五歳で母を亡くしたアリアを一人で別邸に置いておくことはできずに、本邸へ戻したのだが……アリアからすれば、そのまま放置されていたほうがよほどマシだった。
本邸で与えられた部屋は母が幼い頃に過ごしていた子供部屋だったが、すぐに義姉に奪われた。
義理の姉は当時七歳で、アリアの物をなんでも欲しがる貪欲な少女だった。
『妹のくせに、こんな綺麗なドレスを着て、ずるいわ』
母が拵えてくれたドレスや人形、アクセサリーを次々に奪われて、最後は部屋からも追い出された。

『そこが、貴方にはお似合いよ』

くすくすと笑う義姉に押し込められたのは、使用人でも使わない屋根裏部屋だった。

ベッドと机とクローゼットだけの、がらんとした部屋。ドレスの代わりに古びたワンピースを普段着として与えられた。そうして五年間、アリアは使用人の仕事を強いられた。

掃除に洗濯、調理の下拵え。およそ令嬢がするはずのない仕事をさせられた。食事は更にひどい。裕福なエランダル家では使用人の食事もそれなりのものだが、彼女に与えられたのは、硬い黒パンと野菜の切れ端がほんの少し入った味の薄いスープ、たったそれだけ。

義母はアリアが少しでも失敗するとすぐに鞭で打ったし、義姉は母を真似て彼女をひどく罵った。父はそんな二人の行動を知ってか知らずか、実の娘であるはずのアリアをいない者として扱い、ずっと無関心でいた。

いつしか、昔からエランダル家に勤めていた使用人たちは、全て解雇されていた。忠心から諫言しようとした彼らを父は嫌ったのだ。陰ながら母娘を助けてくれていた使用人たちがいなくなり、アリアは一人ぼっちになった。

どうにか十歳まで生き延びたが――きっと、このままだったら衰弱死していただろう。

「……でも、前世を思い出した」

かすれた声を喉から絞り出す。震える指先でコップを引き寄せて、喉を潤した。ようやく息がつける。そっと、痩せ細った両腕で自身を抱きしめた。

「可哀想な、アリア。でも、これからは私が守ってあげる」

栄養不足で肌もボロボロの少女は、年齢相応に見えないほど貧相だ。今まで虐げられてきたアリアとは全く異なった、凛とした声音で告げる。

「ステータスオープン」

魂の管理者が教えてくれた呪文を唱えると、今現在の彼女のステータスが見える。

目の前に現れた、本人にしか見えないらしい透明のボードを挑戦的に睨みつけた。

「さぁ、反撃の開始よ」

アリア・エランダル（工藤渚）十歳
レベル1
HP（ヒットポイント） 3／10
MP（マジックポイント） 150／10000
力 5　防御 4　素早さ 6
器用さ 20　頭脳 100　運 10
スキル 生活魔法・全言語理解・鑑定・掃除・調理・洗濯（※SP（スキルポイント） 100）

「……なるほど？」

自身のステータス値がとんでもなく低いことはなんとなく分かった。器用さや頭脳の数値に比べて身体的なステータスが全て一桁なのは、十歳にしてもかなり弱い部類に思えた。それもHPから

して納得だ。元々の体力がない上に残りも少ない。かなり危険な状態だ。
秀でた才能、突出した技能のことを「スキル」と呼ぶようだ。
魂の管理者に貰った【生活魔法】と【全言語理解】【鑑定】スキルはしっかりある。【掃除】【調理】【洗濯】スキルは不本意ながら、使用人として五年間こき使われた際に得たものだろう。
さっそく使った【鑑定】によると、スキルや魔法は使えば使うほど、派生スキルやより強い魔法を覚えられるようになるらしい。
努力がちゃんと結果として表れる世界なのは素晴らしい。
ＭＰ――魔力が高いのはありがたい。腕力がない分、魔法で戦える。使った覚えがないのに魔力が減っているのは、肉体を維持するため無意識に体力へ変換していたのか。
「とにかく、まずはスキルを得よう。このＳＰ表示がスキルポイントかな？」
ステータスボードのＳＰの欄をタップすると、アリアのステータスが消え、代わりにスキル名と魔法が並んだ。これが今取得できるスキルと魔法なのだろう。

・無限収納ＥＸ　60ポイント
・武術スキル　30ポイント
・光魔法　30ポイント
・闇魔法　30ポイント
・四聖霊魔法　30ポイント
・錬金術　20ポイント
・治癒魔法　20ポイント
・剣術スキル　20ポイント
・身体能力向上　20ポイント
・気配察知　10ポイント
・生産能力　30ポイント
・隠密能力　10ポイント

「えー……どれも欲しい。悩ましい……」
しばらく悩んだが、まずは【治癒魔法】をタップする。スキルを得てすぐに、自身に治癒の魔法をかけた。柔らかな光に包まれ、息苦しかった胸がすっと楽になる感覚にほっと息をつく。
喉ももう痛くないし、細かな傷や血が滲んでいた指先も綺麗に治っていた。
「ちょっと楽になったわね」
身体が回復すると、途端に空腹を思い出した。いそいそとベッドから起き上がり、テーブルに置かれたスープを口に運ぶ。相変わらず具がほとんどない薄味のスープだが、病み上がりにはちょうど良い。空腹が良い調味料となり、スープは綺麗に飲み干した。
お腹の奥から身体全体がポカポカと温まってくる。このまま眠りにつければとても心地よいのだろうが、今はまだおあずけだ。
「他のスキルは何にしようかな？」
家族への直接的な復讐を第一に考えるならば、攻撃力のあるスキルを選ぶべきだろう。けれど……
「うん、まずはこのクソったれな家から抜け出して快適な生活を送るためのスキルを選ぼう」
憎い家族を害せたとしても、それと同時に自分が傷付くのも、命を落とすのも悔しい。
それよりもアリアがアイツらよりも幸せになることが一番の復讐になる気がした。
（まあ、もちろんアイツらを地獄に突き落とすことも諦めてはいないけどね！）

優先順位を間違えてはいけない。まずはこの家でじっくりと身体を回復させ、力を蓄えてから脱出しなければ。なんの準備もなしに無手で逃げ出したとしても、すぐに力尽きて捕らえられるか、大森林の魔獣の餌になるだけだ。

「よし、決めた。まずは異世界物語定番のこのスキル！」

【無限収納ＥＸ】を迷わずタップ。出奔するからには、荷物をたくさん収納できる能力は重宝するだろう。それにこの消費ポイントの高さに、このスキルだけＥＸ付きの名前。絶対に何かある！

「残り20ポイントは、逃亡者として【気配察知】と【隠密能力】スキルかな」

全てタップしたところで、ＳＰ欄は消えた。

代わりにステータスボードのスキル欄に新しいスキルが追加されている。

「うん、いいね。これでひと安心。とりあえず、明日からはスキルを使って準備しなきゃ……」

呟きながら、小さく欠伸をする。もう少し考えたかったけれど、体力のない小さな身体にはこれが限界だ。のそのそと硬いベッドに戻ると、ブランケットに潜り込む。

おやすみなさい。誰にともなく囁いて、意識を闇に滑り込ませた。

第二章　家出しようと思います

アリアにとって幸いなことに、エランダル家の使用人たちで彼女に関心を持つ者はほとんどいなかった。そのため寝込む少女の世話をする者もなく、彼らは交代で一日に二度、朝と夕の食事を屋根裏部屋の粗末なテーブルに運ぶだけだった。

寝込む前までは自分たちの仕事を押しつけてきたものだが、さすがに力なく横たわる少女に無理強いはしなかった。しかし、彼らは今の彼女が【治癒魔法】で回復していることを知らない。

「ということは、朝食と夕食の時だけ部屋にいれば、あとは自由ね」

ニヤリと不敵に笑う。薄いスープに硬いパンを浸した食事を終えると、アリアは立ち上がった。

ちなみに薄汚れた部屋が我慢ならず、【生活魔法】の【浄化魔法】スキルを使ったため、快適に過ごせている。

【生活魔法】は便利だ。大きな括りで【生活魔法】と呼ばれているが、内容は多岐にわたる。まずは汚れを落とす浄化の魔法。これのおかげで今のアリアは風呂いらずだ。

他にも飲み水を出す魔法や火を点ける魔法、木材や食物を乾燥させる魔法など、チートではないが、とても便利な能力を使えるようになった。

魂の管理者には感謝しかない。

おかげでいつから風呂に入っていないのか不明なほど垢が浮いていた肌も、今はぴかぴかだ。べたついていた髪もサラサラで天使の輪が光っている。

「うん、あらためて見ても、アリアって美少女じゃない？」

綺麗に磨いたクローゼットの鏡の中にはとびきりの美少女がいる。

腰まである柔らかく波打つ金髪に、瞳は晴れた日の真っ青な空の色。痩せているため余計に大きく見える瞳が目立つが、使用人たちを見ていると、色彩自体はよくある組み合わせのようだ。

陽に焼けたことのない白皙の頬は、今はまだ青白く不健康だが、薔薇色に輝けばどれほど愛らしいことか。惜しむらくは棒切れのように痩せ細った手足の貧相さで。

「まあ、栄養不足だから仕方ないよね」

粗食が身体に良いのは、飽食の時代の日本だからこそ。

「体力を底上げするためにも、しっかりとご飯を食べないと！」

だいたい、十歳の子供が一日に二食だけというのは頂けない。貴族は朝食と夕食のみの食事スタイルが多いようだが、アリア以外の家族にはちゃんと午前十時の軽食と午後三時のティータイムがある。

つまり、アリアはやはりネグレクト状態だったのだ。とても腹が立つ。

「食糧を調達しに行こう！」

そっと部屋を抜け出して、まずは洗濯室へ。一番サイズの小さなメイド服を見つけると、【浄化魔法】で汚れを落として身に纏った。多少のサイズ違いは気にしない。

屋敷内を移動中に万一誰かに見咎められても、使用人の振りをして逃げるつもりだ。

「とはいえ、見つからないのが一番だから、【気配察知】と【隠密能力】を使おう」

攻撃魔法などに比べて、これらのスキルは魔力の消費が少ない。ちなみに【無限収納ＥＸ】はＳＰ消費量を考えると魔力消費も大きそうなものだが、なぜだか収納する際の魔力消費が一切ないので助かっている。

いざ移動を始めると、【気配察知】は優秀だった。人の気配を感じると、大きな花瓶の陰や曲がり角に隠れて【隠密能力】で使える隠蔽魔法を使用する。

その繰り返しで、誰にも見つからずに食糧庫に潜り込めた。

食糧庫は幾つかに分かれている。根菜類を中心としたよく使う野菜と穀物類はキッチンから最も近い一室に。冷暗所での保管が必要な野菜や果物に酒類、調味料や加工品の類は地下一階の冷蔵庫。肉や魚介類などの生鮮食品は地下二階にある冷凍室で管理されている。

ちなみに冷凍室は氷を生成する魔道具を用いて作られた部屋だ。高価な魔道具のため、使えるのは貴族と一部の商人だけだと母に聞いたことがある。

「さすがに生肉や生魚はそのまま食べられないから、今はパスしておこう。狙うは加工品」

朝食の準備も終わり、キッチンは暇なはず。使用人たちも休憩している時間帯なので、色々と頂くには良いタイミングだろう。息を殺して、慎重に地下へ下りていく。

食糧庫の扉の前に立ったが、【気配察知】には誰も引っかからない。チャンスだ。

扉を開けて、そっと中へ侵入する。ひんやりとした空気が気持ち良い。部屋の中は真っ暗だ。

周囲を探り、灯りの魔道具を見つけた。魔道ランタンの出力を一番小さく設定して、木製の棚に並ぶ食糧を吟味していく。

さすが高位貴族家の食糧庫。使用人の数も多いため、備蓄も含めて大量に積まれている。

「うん、これだけあれば少しずつ持っていってもバレないわね。ふふ」

にんまりと笑いながら、目を引いた食糧を【無限収納ＥＸ】に収納していく。大量には持ち出さない。盗みがバレて見張りがついたら厄介だから、気付かれない程度に間引きしていった。

育ち盛りの身体はとにかくタンパク質を欲しているようだ。気が付けば燻製肉やベーコン、生ハムのブロックを積極的に収納していた。

「生ハムはさすがにヤバいかな？　いやでも、あと十本以上あるし、大丈夫だよね？」

目にした途端、我慢できなくなってしまったのだ。

前世でも憧れていた、生ハムの原木の誘惑には敵わない……

「卵もいっぱいあるから、カゴひとつ分貰っちゃおう。収納内は時間経過なしだから便利だよね」

あとは瓶詰めの野菜のピクルスに、同じく瓶詰めのシロップ漬け果物。ジャムもひとつ。

甘い食べ物に飢えていたアリアのために、蜂蜜も失敬した。こちらは大きな壺に入っていたので、木製のコップに一杯分だけ貰っておいた。

砂糖や塩などの調味料は稀少で高価なため、今は諦める。

痕跡を残していないか慎重に確認して、魔道ランタンの灯りを落としてから脱出した。

ついでにキッチン隣の食糧庫へ寄り、果物や野菜を各種ひとつずつ頂いていく。木製のパレット

箱に山積みされているから、バレることはないだろうが、念のため。

使用人用の木製の食器やカトラリーも置いてあったので、こちらも一組ずつ貰った。

「あー、いい匂い……」

食糧庫を出ると、隣のキッチンから食欲を刺激する匂いが漂ってきた。アリアの小さなお腹からくぅ、と可愛らしい音がする。

（ちょっとだけ。ちょっとだけ覗いてみても、いいよね……？）

【気配察知】は、そこに誰もいないことを教えてくれていた。

誘惑に負けてキッチンにそっと潜り込む。いつもは片隅でじゃがいもの皮を剥いていたので、料理長が仕切る奥の調理室に入るのは初めてだ。

「ふわぁ……！　美味しそう……」

魔道コンロの上でくつくつと良い匂いを放つ大鍋の中身は、シチューだった。

野菜とお肉がたっぷり入った、ミルクシチュー。母が生きていた頃に食べて以来の好物だ。

お玉ですくってそのまま飲みたい誘惑にかられたが、どうにか我慢する。

「バレない程度に……。このスープ皿に一杯くらいなら大丈夫だよね？」

アリアの小さな両てのひらほどの大きさの木製スープ皿に、慎重にシチューを移していく。暴力的なまでに良い匂いを漂わせるスープ皿をそうっと収納すると、他にも持っていけるものがないかと周囲を見回した。

「あ、パン……。これだけあるなら平気だね」

いつもアリアに与えられるカピカピの黒パンと違い、美味しそうなクリーム色の丸パン。カゴに積んで、乾かないようにか、濡れた布巾が無造作にかけられている。

おそらく使用人たちの夕食用なのだろう。多少のおかわりは許されている彼らのために、多めに焼いてある。これも三つだけ失敬することにした。

鍵付きの食器棚に高価な陶器のティーセットと一緒にしまわれた銀食器には、今はまだ手を出さない。アリアの高性能な収納スキルなら対象を手に取らずとも目視するだけで奪うことは簡単だったが、泥棒騒ぎが起きるのは困る。

ちなみに高価なのはお菓子もだ。缶入りの焼き菓子は父や義母、義姉のティータイムに出される物だろう。とても後ろ髪を引かれたが、本日のところはここらへんで諦めることにした。

一時間ほどの探索にしては、なかなかの成果だと思う。

部屋に戻るとワンピースに着替え、いそいそと椅子に座る。収納からシチュー皿を取り出してテーブルに載せた。それからパンを一個と、栄養を考えてピクルスも平皿に並べてみる。

カトラリーは木製のフォークとスプーン。【生活魔法】で満たした水のグラスを置いて、そっと手を合わせた。いただきます。待ちに待ったシチューをスプーンですくって口に含む。

甘い、と思った。味があると感動する。ニンジンとじゃがいも、玉ねぎの甘みにうっとりとする。なんの肉かは分からないが、ごろりと大きな塊に自然と目が輝いた。

スプーンでは転がり落ちそうなので、フォークを突き刺して咀嚼する。

「美味しい……！」

小さく叫んでしまう。よく煮込まれた肉は噛むほどに口の中でほどけていき、気が付くと消えていた。シチューの味に負けない、濃厚な肉だった。なんの肉だろう、と皿の中をじっと眺めていると、【鑑定】スキルが発動し、それがオーク肉であることが分かった。

「魔物の肉って食べられるんだ……」

さすが異世界と、妙なところで感動してしまう。元々食べることが好きだったので、魔物だろうが特に忌避感はない。こんなに美味しいのなら今後どうにかして積極的に狩っていきたいなとさえ思う。

「さて、このパンはどんな味かな……？」

手に持つと、黒パンよりは食べやすそうだが、噛み応えがありそうだ。一口、かじってみる。

少しポソポソしているが、大麦の味がして香ばしい。前世で食べたカンパーニュの味に似ている気がする。半分ほどをシチューに浸して食べ、残りの半分はジャムをお供に食べてみた。

「砂糖が少なめだけど、久々の甘味美味しい……」

蜂蜜で作られたジャムのようだ。ベリー系だろうか。酸味が強いが、香りが良い。硬めのパンにはよく合う。残さず食べ終えると、ふぁーっと満足のため息がこぼれ落ちた。

こんなに腹が幸せで満ちたのはどれくらいぶりだろう。少なくとも、母を亡くしてからのこの五年間はいつもお腹を空かせていたように思う。美味しい美味しいと夢中で食べたが、もちろん前世の日本の食事と比べたら、質も味も数段落ちる。

それでも飢えに飢えていたこの身には沁みるほどの旨さを感じたのだ。

「うん、これからもご飯はしっかり食べよう」

あらためて、アリアは誓う。食事は大事だ。

この貧弱な肉体をもっと子供らしい、ふっくらとした身体にしなければ。それからスキルを鍛え、いずれ脱走する時のために食料品や必要な物を少しずつ失敬し、収納に貯め込もう。

「できれば美味しいご飯を三食おやつ付きで食べられますように……！」

満たされたお腹を撫でながら、ベッドに寝転がる。食べて、眠って、今はリハビリ期間。

ずっと強張っていた幼い顔にようやく、柔らかな微笑が浮かんだ。

粗食と悪環境で弱った身体は、繰り返し【治癒魔法】をかけても、すぐには回復しなかった。

病や怪我は治っても、痩せ細った肉体は休養を欲している。キッチンを往復するだけでも肩で息をする体力のなさに、アリアは家出前にしっかりリハビリに集中することを決めた。

「栄養のある食事をきちんと三食とって、あとは体力作りのウォーキングと体操かな」

食糧庫漁りは毎日続けている。一度に大量に持っていくとバレてしまうので、少しずつ着実に貯め込んだ。

最初は旅に向けて、携行食になる干し肉や干し果実などを中心に収納していたが、途中でふと気が付いた。容量無制限の【無限収納ＥＸ】を使えば幾らでも収納できるし、収納内は時間が経過しないので中身が劣化しない。知っていたはずなのに、すっかり失念していた。

（あれ？　これ、別にわざわざ不味い保存食を収納しなくても良いんじゃない？　むしろ単調な旅

では食事だけが楽しみなのだから、あったかくて美味しいご飯を食べるほうが絶対に良いのでは）

そう気付いてからは、積極的に新鮮な食材を選ぶことにした。なんなら大きな寸胴鍋からスープを小鍋いっぱいに失敬するのにも慣れた。大量に焼かれたパンも狙い目だ。

食材の他にも皿やカトラリー、フライパンに鍋、包丁やまな板など、食器類や調理道具もしっかり収納した。

銀食器や陶器と違い、こちらはきちんと管理されていないので頂くのも簡単だった。メイド服は身丈を合わせて手直ししたのでそれほど違和感はないはずだ。領主の館には行儀見習いとして幼い少女が遣わされるため、小さな子供が使用人棟を歩いていても咎められることはなかった。

（まさか、自分たちが仕える屋敷の令嬢がこんなところにいるなんて思いもしないでしょうしね）

アリア・エランダルが貶められ、放置されていることを知る使用人は少ない。家政を預かる侍女頭と筆頭執事だけは、彼女の正体を知っている。知っていて虐待に加担しているのだ。

他の使用人たちにとっては、薄汚れた痩せっぽちの少女は領民から選ばれた行儀見習いの娘の一人だ。よく寝込む、役立たずの行儀見習い。

（おかげで放置されて自由行動がとれるのはラッキーだけど）

今のアリアの姿は【浄化魔法】のおかげで見違えるほど綺麗になった。放置されていた五年の間、普段着として、ぼろぼろのワンピースしか与えられていなかったので、こんなお仕着せのメイド服でも綺麗な服に袖を通せるのが嬉しかった。

「さて、今日のお昼ご飯は何にしようかしら」

朝食後の調達作業も終え、部屋に戻ったアリアは上機嫌で収納リストを展開した。

脳内で思い浮かべることもできるが、じっくりと決めたいので、今はステータス画面からスキルをタップして収納品のリストを眺めている。

「さすがにここで煮炊きはできないから諦めたけど、家を出たらパスタを食べたいな……」

転生したこの世界は、地球の中世時代よりは進んでいると思う。どちらかと言うと近世に近いイメージだ。

「発展している理由は、魔道具のおかげかな。あれはもう反則級よね……」

魔道具は貴族の屋敷にはたくさん配置されている。ランタンにシャンデリアなどの灯りはほぼ魔道具だ。キッチンには魔道コンロがある。その他にも便利な魔道具はたくさんあるらしいが、アリアはあまり見たことがない。何せ魔道具は高価な代物だ。

特別な技術で作られ、あるいはダンジョンの宝として発見される魔道具は、魔石を燃料として動く贅沢品なので、貴族や特定の職種の者しか所有していない。

「たしか、お父さまが魔道具マニアだったわね」

思い出して、口角を上げる。辺境伯は国境を守るために王家から多額の援助金を得ている。戦や魔物退治を口実にたくさんの魔道具を購入していたと、母から聞いたことがあった。

「家出するついでに、大事な魔道具も頂かないといけないわね」

くすりと軽やかに笑いながら、収納からパンやスープを取り出す。今日の昼食は、パンにベーコンとレタス、トマトとピクルスを挟んだバーガーもどきだ。マヨネーズがないので物足りないが、

ベーコンの塩味が利いており、わりと美味しい。スープは野菜たっぷりのポトフ。デザートには小ぶりのリンゴを。時間をかけて、全てを平らげた。

「食休みの後で、リハビリと偵察を兼ねて屋敷内を探検しましょうか」

食事が届く朝と夕方はワンピースに着替えてベッドに潜り込み、寝た振りをしなければならない。うっかり出歩いていることがバレないように気を付けよう。

「疲れても【治癒魔法】を使えば回復するし、スキルも鍛えられるから、本当に魔法って便利！」

そんな使い方は宮廷魔法士並みの魔力量によりできる力技だが、この時のアリアはそれを知らなかった。

【気配察知】と【隠密能力】を駆使して、今日も屋敷内ウォーキング中。

エランダル家の屋敷は地下二階に地上三階建ての豪奢な館だ。コの字形の建物で、テニスコート四面分はありそうな中央棟の一階にダンスホールと応接間を据え、二階には客間、三階には家族の寝室がある。庭園を挟んだ二棟は応接間や食堂、客室に、使用人が使う部屋など。

二階の窓からは、五年前までアリアが母と共に追いやられていた別邸が見える。豪奢な本邸に比べたらとても小さな屋敷だが、元日本人からすればこちらも充分な豪邸だった。

（いずれ体力を取り戻したら、別邸に母の形見を取りに行こう）

病に臥した母はその後を憂慮していたのか、本邸から自身の持ち物を全て運ばせると、別邸に特別な鍵を掛けた。それは母の――エランダルの血を濃く引く者しか開けられない、魔法の鍵だ。

結界術として使われる高価な魔道具で、母亡き後、別邸に入れるのはアリアだけとなった。

そのおかげで、母の遺品は義母や義姉に荒らされることなく守られている。

「家を出る前にあの屋敷の中の物を全部収納しなくちゃね」

辺境伯令嬢だった母の持ち物は高価な物が多い。アリアの五歳までの記憶はあやふやだが、家財道具はもちろん、豪奢なドレスに宝石、魔道具もあったように思う。

本邸に連れ戻された時に持ち出せなかった自分のドレスやアクセサリーも保管されたままだ。

（……感傷に浸るのは、今じゃない）

【隠密能力】はとても便利だ。使用人たちの他愛ないお喋りからでも、様々な情報を仕入れることができた。だから、今では色々と知っている。

いずれここから出奔するために必要な知識だ。

「知識といえば、図書室から本を持っていかないとね」

この世界では書物は財産だ。羊皮紙は稀少で高価なため、製本された本には金貨数枚の値がつけられる。魔道書などの専門書は更に高価で、宝石と変わらぬ価値があるという。

「もっとも、この家では誰も本なんて読まないから、宝の持ち腐れよね」

父は基本的に脳筋で、書に興味はない。義母も本を読むより音楽や劇に熱中している。義姉に至ってはアリアよりも年上のくせに、いまだに字が読めないらしい。

「使用人も字が読める者は少ないし、そもそも主人の財産には手を触れられないから、図書室には

誰も入らない。ありがたく、頂いていきましょう」

軽やかに笑い、図書室を目指して歩き出す。図書室は本邸の二階だ。

【気配察知】で気を付けながら、階段を上っていく。上りながら、もうあまり息切れしないことに気付いて、アリアは笑みを深めた。順調に体力もついてきたようだ。

磨かれた窓ガラスを鏡代わりに覗き込むと、前世の記憶を取り戻した日とは別人のようにふっくらしている。とはいえ、前世で見ていた同年代の子供と比べても随分と小柄だし、手足も華奢で頼りない。

「もう少し体力がついたら、計画を練ろうかな」

父が母から奪った家を小娘一人で合法的に奪い返すのは難しい。父が辺境伯を継いだことを証明する公的な書類があるのだ。そこからひっくり返すのは、無力な子供には不可能に近い。

（なら、本来自分が継ぐはずだった財産くらいは、慰謝料代わりに持っていってやろう）

そのためには知識が必要だ。アリアはそっと周囲を窺って人気のないことを確認すると、図書室に潜り込んだ。

義母は週に一度、お茶会を開く。自慢の庭園に人を招き、紅茶と菓子でもてなしている。参加者のほとんどがエランダル家の寄子貴族で、子爵や男爵、騎士爵の妻女だ。

「つまりは同位の貴族奥様方には全く相手にされていないってことよね。まあ、当然だけど」

義母は元々街の酒場に勤めていた女だ。容色だけは秀でており、肉感的な肢体を駆使して客の男

たちを籠絡していたらしい。そこに引っ掛かったのが、情けないことにアリアの父だ。

付き合いは母と婚姻を結ぶ前からで、父は辺境伯に仕えるエリート騎士団長というだけで街では人気だったようだ。義母はすぐに父と関係を結び、子を産んだ。そのままうまく結婚したかったようだが、前辺境伯の一人娘との婚姻を狙っていた父に断られた。

とはいえ、二人の関係は父が婿養子に入った後もずっと続いていたのだ。二股をかけた父はもちろんだが、しっかりと相手を調査しなかった、顔も知らない祖父にも腹が立つ。部下で、しかも大事な娘の相手くらいきちんと事前調査しておけば、家を乗っ取られないで済んだのに。

エランダル家は代々勇猛な騎士の家系と言うが、単に脳筋のおバカさんだったのでは疑惑。あっさりと父に掌握された親戚連中も間抜けすぎだろう。おかげで本来の後継者たるアリアがこんな悲惨な状況にいるのだ。

「まあ、どうせここを継いだとしても適当な婿養子をあてがわれるだけだから、とっとと家を出て好きに生きるに限るわね」

現代日本で一人暮らし歴十年の元アラサーＯＬだったアリアにとって、不自由なカゴの鳥生活のほうがよほど恐ろしい。

「せっかく異世界に転生したんだから、色々な国を見て回りたいし、スキルを駆使して冒険者になるのも楽しそう！」

図書室から持ち出した本でしかこの世界のことを知らない身としては、外の世界が楽しみで仕方ない。

「まあ、それはともかく。今日のお茶会は庭園のガゼボで、参加人数は十人ほど。キッチンは大忙しで準備をしているだろうから、今がチャンスね！」

もちろん、茶葉やお菓子をこっそり貰ってくる予定。高価な砂糖や蜂蜜を使った菓子はお茶会でも大人気だ。貴族とはいえ、子爵や男爵位の奥様方にはなかなか手が出せない代物。

ここぞとばかりに堪能する彼らのために、菓子は大量に用意されている。

つまりは、失敬し放題のチャンスなのだ。この時ばかりは見栄っ張りの義母に感謝した。

いつものメイド服に身を包み、【隠密能力】でキッチンに潜り込む。忙しく立ち働く料理人や使用人たちはアリアに気付かない。ぶつからないよう隅に隠れて、焼き上がった菓子を収納していく。

視界に入った菓子はもちろん、茶葉入りの箱とシュガーポット、蜂蜜が入った瓶も手に入れた。

陶磁器のティーセットもこっそり収納した。いつもは鍵付きの棚に入っているそれは綺麗な白磁のカップだ。今日の参加人数では全ては使用されないはず。

ついでに綺麗に盛られたフルーツカゴから南国の果実も失敬した。他にも焼きたてのパンとジャム、レバーペーストを瓶ごと収納して、さっさと退散。

ちょうど昼時だったので部屋で食べることにする。

「見た目は悪いけど栄養たっぷりなんだよね、レバーペースト」

うきうきしながら、薄く切ったパンにレバーペーストを塗って口に運ぶ。

ねっとりとしたレバーはハーブと柑橘の香りがして、意外と口当たりが良い。

「ん、ん……！　美味しい！　これはお酒が欲しくなる……」

身悶えしながら咀嚼する。前世ではお酒が大好きだった。酒の肴にも目がなかった。だから分かる。これは赤ワインに絶対に合う！

さすがに幼子の身、収納しているワインを呑むのは、今は諦めたが。

「成人したら、絶対にコレで呑もう……」

これは鶏のレバーペーストだが、きっと豚もあるはず。保存食としてたくさん作っているだろうから、色々な種類のパテがあると思う。いや、あるといいな……！

「冷蔵室の奥のほうも確認してみよう……」

午後の予定は決まりだ。

さて、それは置いておいて本日のメイン食材、お菓子をテーブルいっぱいに並べてみる。思い返すと、五年ぶりのお菓子。これはじっくりと味わうべきだ。

せっかくなので紅茶も淹れることにした。

「【水魔法】と【火魔法】を駆使して、適温のお湯を作り出して……っと」

【生活魔法】で鍛えた、飲み水を出す【水魔法】と着火するための【火魔法】を同時に発動する。魔法でお湯を作るのも、すっかり手慣れたものだ。

図書室から持ち出した魔道書は大変役に立っている。豊富な魔力量に物を言わせて、別の魔法も幾つか習得した勤勉さを褒めてほしい。

茶葉がダンスを踊る様をわくわくしながら見守り、良い色合いに染まったところでティーカップに注いだ。お砂糖を一杯、スプーンでかき混ぜる。良い香りだ。うっとりと、久々の紅茶を堪能す

る。少し渋みはあるが、水しか飲んでいなかった身には充分美味しい。
「さて、本命のお菓子！」
異世界のお菓子はどんな物なのだろう。
木皿に載せた焼き菓子は、どれも茶色い。まずはクッキーに似た菓子を摘んで食べてみる。
「ん……？　これは、クッキーじゃないよね……？」
さくさくの食感と甘みを期待していたアリアは固まってしまう。ぽそぽそで塩味のする菓子だったのだ。期待していた分だけ落ち込みながら、別の菓子に手を伸ばした。
「これはゴーフル？　いや、ちがう。これも甘くない……」
次にかじったものも、期待した甘味ではなかった。たぶん、小麦粉と卵を使ったお菓子だが、なぜか砂糖ではなくワインの香りがする。
「不味くはないけど、コレじゃない……」
ジャムや蜂蜜をつけて食べればそれなりに美味しいかもしれないが、断じて菓子ではない。
「これは知っている。ガレットだ。これも砂糖が入ってない……」
とても悲しくなってきた。幾つか食べ進めて、どうやらこの辺境の地でのお菓子は基本、小麦粉と卵と塩、そしてごく少量の砂糖と蜂蜜を加えて焼くだけなのだと理解する。
たまにチーズが挟まったものや、オリーブオイルをバター代わりに焼いたものがあり、それはまだ当たりのほうだと思った。美味しいかは別にして。
「せっかく砂糖入りなのに、塩まで入れているのはどういうことなの……」

甘じょっぱい菓子に当たった時は肩を落とした。惜しい。なぜ、ここに塩を足した。過ぎたるは及ばざるがごとし、だ。とても悲しい。
「まあ、栄養はありそうだよね……。保存食としては優秀そうだし。これはもうさっさと拠点を見つけて、自分で菓子を焼くしかないね」
食べることが何よりも大好きだった前世を思い出す。学生時代に一通りの焼き菓子は作ったことがあるので、どうにかなると思う。
甘さの足りない菓子に容赦なくジャムを塗りたくり、かじりつく。うん、多少のぽそぽそ感はどうしようもないが、紅茶と一緒に流し込めば問題ない。
この世界、砂糖は相当高価な調味料らしい。塩も高価ではあるが、岩塩が豊富なのと国内に海があるので、そこまで高くない。砂糖は全て他国からの輸入に頼っているため、壺一個で金貨一枚の値がつくと書物で読んだ。経済学の本から推察するに、金貨一枚は日本円でおよそ十万円。驚いた。それほど高い物なら、菓子にもあまり使われないのも納得だ。
嗜好品に費やすよりも、貴重な冬場の栄養食として果実を漬けるほうが理にかなっている。
砂糖よりも蜂蜜のほうがまだ庶民の間には出回っている。こちらも少々値は張るが、砂糖よりは断然お得だ。以前は森に取りに行くしかなかったが、最近は一部地方で養蜂に成功したらしく、市場に出回るようになったらしい。
「蜂蜜とバターをたっぷりかけたパンケーキ、いつか作ってやる……」
しょっぱいクッキーを噛み砕きながら、アリアは新たな野望を胸に誓った。

アリアが前世の記憶を取り戻してから、一ヶ月が経つ。
最初の一週間はボロボロの身体を癒すことに集中し、積極的に食事をとった。翌週からはキッチンと食糧庫を中心に食べ物を収納しまくり、やはり積極的に食事をとった。三週目からは体調も整ってきたので、情報収集を兼ねて屋敷中を歩き回り、食糧だけでなく日用品や雑貨も少しずつ、そして美味しい食べ物を狙って収納、摂取した。
四週目ともなれば屋敷内のどこに何があるかを完全に把握し、食糧庫の奥の隠し扉の向こうで発見した砂糖壺や塩壺を大喜びで収納したし、もちろん味の薄いスープに投入して美味しく頂いた。
「あれ……？　なんだか、私食べてばかりじゃない？」
指折り数えながら気付いた事実に、小首を傾げてしまう。うん、仕方ない。だって、可哀想なアリアは五歳の時からずっとお腹を空かせていたのだ。多少、食に意地汚くなるのも当然というもの。そのおかげでここまで元気になれたのだから良しとしよう。
父の書斎で見つけた羊皮紙につらつらと今後の予定を書き連ねる。こちらの世界の言語は問題なく書けるが、人に見られる可能性も考えて、念のため日本語で。
「義母主催の茶会が週に一度、義母と義姉が王都まで買い物に出掛けるのが月に一度」
周期が分かれば、動きやすい。二人が不在のうちに彼女たちの部屋に侵入し、幾つか物を失敬している。ドレスや宝石に目がない義母のコレクションは膨大だ。種類も数も多いため、滅多に在庫

を調べていないから、持ち出しても気付かれることはなかった。
母のアクセサリーやエランダル家に代々受け継がれている宝石類を探し出し、しっかりと回収した。古いデザインだとバカにしていたからか宝石箱の奥に放り込まれていたので、しばらくはバレないはず。
ドレスは慎重に選んだ。最新のデザインの物は避けて、流行遅れの型や色のドレスを収納する。買ったばかりのお気に入りが消えれば、さすがに騒ぐだろうから。プライドの高い義母が何度か袖を通したドレスや数年前のデザインには見向きもしないことは、メイドたちの噂話から知った。
「ドレスは街の古着屋でそれなりの値段で買い取ってくれるから、幾つか持っていこう」
こちらの情報もメイドから仕入れた。義母のドレスはたまにお気に入りの侍女に下げ渡されることがあるらしく、良いお小遣い稼ぎになるという。
「宝石類の換金は難しいから、しばらくはドレスで稼ぐのが良いわね。メイド服を着て売りに行けば怪しまれないだろうし」
家出した後の金策には今から頭を悩ませている。十歳ではなかなか働き口は見つからないだろうし、下手に高価な品を換金しようとしたら、盗難を疑われてしまう。
「もちろん我が家の金庫の中身も頂戴するけど、金貨ばかりだと使う時に怪しまれちゃうもんね」
義姉の部屋からはアリアが幼い頃に奪われたアクセサリーやぬいぐるみ、人形などを回収した。
父や義母にねだったのだろう大量の人形に埋もれていたので、こちらもバレないはず。アリアから奪ったのは単に嫌がらせが目的だから、品物自体には興味がなかったようだ。

「あとはサイズアウトした子供用のドレスと……。あら、これ良いわね」
クローゼットルームの奥から見つけたのは、子供用の乗馬服だ。貴族の娘として揃えたのだろうが、馬を怖がる義姉は袖を通したこともない。出奔する時にスカートでは不便だし、これも頂いて行こう。ウキウキと衣装を物色し、部屋の主が帰ってくる前に退散した。
ちなみにアリアは父親のスケジュールもほぼ把握している。脳筋で戦うことが三度の飯より好きな戦闘狂の父は、月のうち一週間しか屋敷にいない。国境線を守る砦に出向き、大森林の浅い場所で魔物退治に参加している。辺境伯自ら、だ。知った時には驚いたし、心底呆れたものだ。
（だったら、ずっと騎士のままでいれば良かったのに）
母との婚姻を望んだのは、エランダル家の財産が目当てだったのだろう。地位はもちろんだが何より欲したのはエランダル家の宝物や魔道具だと、口さがない使用人たちが噂していた。
父は稀少な武器や魔道具を手に入れると、母を捨てた。元凶のそれら魔道具はもちろん全て貰っていくつもりだ。元々はエランダル家が王家から賜ったもの。正当な後継が受け継ぐのが筋でしょう？　全てを奪って、父の目の前で「ざまあ！」と叫んでやりたいが、そこはぐっと我慢して、とっとと消え去ろう。
「決行は半月後。年に一度の祝賀会の日に出奔しましょう」
半月後、大森林内で大規模な魔物狩りが行われる。年に一度の大遠征だ。帰還した騎士たちを労う宴には周辺貴族も招待されている。そのごたごたの時期を狙って家を出るつもりだった。
「それまでは今まで通りに体力を温存、役立つ物を片っ端から収納ね！」

スキルレベルを上げ、新たな魔法の勉強もしなくては。
「それと、忘れちゃいけない、マスターキーの複製！」
つたない文字で綴られた計画書を眺めながら、アリアは不敵に笑った。
当主が不在がちなため、本邸のマスターキーは普段は家政を取り仕切る筆頭執事が管理している。チェーンに通した鍵を常に首にかけて肌身離さずにいるので、手に入れるのは難しい。
「でも、私には最強の【無限収納ＥＸ】があるからね！　こんなこともできるのよ」
【隠密能力】で気配を殺し、使用人用の食堂で朝食をとる老執事の隙を見てマスターキーを目視で収納する。視界に収めさえすれば、なんだって奪えるのだ。
さっそく空き部屋に移動し、【生活魔法】から派生した【土魔法】で粘土を作り出す。粘土で型を取り、汚れを拭いたマスターキーを収納して食堂へ戻った。
収納から取り出す際には置き場所も指定できるから、こっそり拝借した物を返すのも簡単だ。ただ、ネックレスのチェーンに鍵を返すのは難しいので、金具が外れて床に落ちたように見せかけた。滑り落ちたマスターキーを執事は慌てて拾い上げる。
首から鍵が消えていたことには全く気付いていないようだ。
ドキドキと高鳴る胸を押さえながら、自室に戻った。次は粒子の細かい砂を作り出して型に流し込み、複製する。細やかな魔力操作が必要だったが、集中してどうにか乗り切った。
このマスターキーさえあれば、魔道具を保管している宝物庫と別邸に自由に出入りができる。
悪い笑みが浮かびそうになる柔らかな頬をふにふにと宥める。

トップである父がおバカな脳筋なためか、部下たちも似たり寄ったりのろくでなしであることは、この一ヶ月で実感した。ここしばらく、食糧庫の中身やその他の備品を相当な数失敬したのに、全く騒ぎになっていない。不審だと指摘する者が一人もいないのだ。同じように物資を盗む使用人が大勢いるからなのだろう。

物資の管理は適当、領地からの税収入に関しても父は全く確認せず、部下に丸投げしている。

「そんなんじゃ、横領し放題よね？」

証拠の書類はしっかり集めよう。

複製マスターキーを手に入れて、真っ先に向かうのは別邸だ。訓練場になっている広場で鍛錬する騎士たちに気付かれないよう庭園を突っ切って、閉ざされた屋敷へ到着する。以前は美しく整えられていた庭園が荒れ果てている様はもの悲しい。

そっと鍵を鍵穴に差し込み、魔力を流す。エランダル家の血を引く正統な後継者の魔力に反応し、五年間かたく閉ざされていた扉がゆっくりと開いていく。

「……久しぶり」

かつて母と過ごした、懐かしい部屋。

埃ひとつ落ちていない様子に、結界術と状態維持の魔法の両方がかけられていたことに気付く。

そっと寝室の扉を押し開けてみると、懐かしい光景に息を呑んだ。変わっていない。

時が止まっていた、優しい世界に足を踏み入れた。

甘酸っぱい記憶に圧倒される。中央にはひときわ大きなベッド。天蓋付きの立派なベッドのレースカーテンをそっと開いてみても、もちろん母はそこにいない。最期まで母に付いてくれたメイドが整えたのだろう。綺麗にベッドメイクされ、汚れはひとつも見当たらない。

アリアが五人は横たわれそうなそこにそのまま転がりたくなる誘惑にどうにか耐えて、室内を探索する。

立派なデスクが目に入った。母がたくさんの書類に囲まれていたのを覚えている。

ここで辺境伯代理としての執務をこなしていたのだろう。羽ペンにインク、壁際には図鑑や実用書の並んだ立派な書棚。それと、革張りで座り心地がいいシンプルな四人掛けソファ。

派手好きな義母とは違う、どれも落ち着いたデザインで質の良い物ばかりが集められていた。

「さすがに趣味が良いわね」

口許を綻ばせながら、隣室へ向かう。そこはクローゼットルームで、ドレスや靴、アクセサリーの類が収納されていた。流行に左右されない、定番の落ち着いたデザインが多い。これならば多少の手直しで、ずっと着ることもできるだろう。

「ん？　何か、これだけ違和感が……」

ドレスをかき分け、華やかな帽子の箱に埋もれた、木製のパレットが目に留まる。

趣味の良い物に溢れた部屋で妙に浮いている。果物や野菜を詰めるのに使うような、シンプルで安っぽい箱を開けてみようとしたのだが……

「っ！　え、これにも魔法？　私の魔力を流せばいいのかしら……」

パチン、と弾かれた指先をもう一度、そうっと箱の縁に触れさせて魔力を流し込んでみる。

抵抗感がなくなると同時に、箱の蓋が開いた。箱の中にはひと抱えほどある皮の袋が入っている。袋を覗いて、息を呑んだ。驚きに瞠目する。そこには金貨、銀貨、銅貨とたくさんの硬貨が詰め込まれていた。金貨は五十枚ほど、銀貨はすぐには数え切れない枚数だ。

箱の中には一枚の紙切れが落ちている。走り書きで、こう書かれていた。

『自由に使いなさい。愛しているわ』

母の字だ。病で弱っていたせいか細く頼りない文字だが、美しい筆跡は見間違えることはない。

「あんなに弱っていたのに、私のために財をかき集めてくれたのね……」

父の目につかぬよう、どうにか用意したのだろう。母がどれだけこの未来を予見していたかは分からないが、その愛情はきっちりと伝わった。

「ありがとう、お母さま。大事に、有意義に使わせてもらいます」

後で数えてみたところ、日本円換算で一千万円近くの金額があった。金貨よりも銀貨が多かったのは、子供の身で使いやすいように考えてくれていたのだろう。

感謝しながら、ぎっしりと重い皮袋を収納した。

母の主寝室の向かいの部屋が、かつてのアリアの部屋だ。状態維持の魔法がかかった室内は色褪せることなく、以前のまま残っている。可愛らしく整えられた部屋に、自然と笑みがこぼれた。

水色を基調とした優しい色合いの部屋だ。子供部屋らしく、レースとリボンで可愛らしく飾られている。ベッドも前世の絵本で見たことのある、お姫さまベッドそのものだ。

クローゼットルームには五歳まで着ていた衣装が全て残っている。少し大きめのサイズのドレスまであった。娘の成長に合わせて母が用意していたのだろう。

「これなんて、今の私でも着られそう」

ぽつりと呟く。鏡の前で淡い黄色のドレスをそっと当ててみると、ぴったりのサイズだった。

「……ちょっとだけ、着てみようかな？」

誘惑に負けて、ドレスに着替えてみる。背中のボタンを留めるのが大変だったが、どうにか着ることができた。コルセットが必要な本格的なドレスでなくて良かったと、しみじみ思う。

「わぁ……！　お姫さまみたい」

アリアは頬を朱に染め、全身鏡の前でくるくると回ってみた。布で作られた小さな小花がたくさんあしらわれたドレスは咲き始めの薔薇の蕾のように麗しい。

この一ヶ月ですっかり復調し、肉付きも良くなったアリア。元々が美少女だったのだから、髪の艶も肌も健康を取り戻した今では文句なしの美しさを誇り、まるで妖精のよう。

「お人形遊び、嫌いじゃなかったのよね」

アラサーＯＬも昔は夢見る乙女だったのだ。お人形さん並みの美少女姿で大量のドレスに囲まれては、胸が躍る。かくして二時間ほど、クローゼットルームをひっくり返す勢いでドレスを着替えて遊んでしまったアリアだった。

「ふぅ……」

散らかした部屋を片付けて、本邸へ戻ることにする。【気配察知】で周辺に人気のないのを確認し、慎重に別邸の鍵を掛けた。

本邸の屋根裏部屋に戻り、古びたベッドに腰掛ける。木枠に藁を敷いてシーツを掛けただけの貧相なベッドだ。先程までいた別邸にあった、マット付きのベッドとは雲泥の差。あの柔らかな寝心地を思い出した身には、これはもはや拷問道具にしか思えない。

「……もう、ここを出て行こうかしら。どうせなら快適に過ごしたいし」

拠点を別邸に移せば、その分自由な時間も増える。父や義理の家族たちにバレると厄介だが、ここ二年ほどアリアの存在は忘れられたかのように放置されていたので、大丈夫な気がした。

「筆頭執事と義母付きの侍女頭以外は私のことを見習いメイドとしか見ていないし。意外と平気かも？」

シーツを剥がし、粗末な布団ごと収納する。寝藁も回収し、空になったベッドの上に少し前まで着ていたボロボロのワンピースを折り畳んでおいた。色褪せたエプロンもその上に重ねて置く。他には特に私物もないから、簡単だった。あとは夕食を運んできたメイドに気付かれないよう、片隅で気配を殺して隠れておけばいい……

「――どういうこと？　誰もいないんだけど」

アリアの目論み通り、ノックもなし乱暴に部屋に入ってきた配膳係のメイドは不審そうに片眉をはね上げた。粗末な食事を載せたトレイを雑にテーブルに置くと、ちょうど廊下を通りかかった別のメイドに声を掛ける。

「ねぇ、アイツいないみたいなんだけど、どこに行ったの？」

「さあ？　あら、部屋が片付けられているってことは死んだんじゃない？」

なんでもないことのように、声を掛けられたメイドは肩を竦めてみせた。

「ああ、そういうことね。良かったわ。役立たずに毎日食事を運ぶのも面倒だったもの」

「あらぁ？　でも貴方、アイツの食事、摘み食いしていたじゃない」

「いいでしょ、そのくらい。ちょっと果物とか干し肉を味見しただけよ。どうせ弱りきって食べられなかったんだし」

くすくすと軽やかに笑いながら、メイドたちは部屋を出ていった。

その背を見送り、残されたアリアは地味に腹を立てていた。ただでさえ粗末な食事から更に盗むってどういうこと？　いくらなんでも少なすぎると思っていたが、まさか摘み食いされていたとは。

「毎日タンスの角に足の小指をぶつける呪いをかけてやる……！」

食べ物の恨みは恐ろしいのだ。とはいえ、これで少しの時間稼ぎができるだろう。あとは楽しいお引越しだ。

心の浮き立つままに、リネンルームのタオルやシーツを大量に収納する。良い香りのする石鹸や美容オイルも遠慮なく持っていくことにした。今夜はお祝いだから、貯蔵庫のワインや果実ジュースの瓶も収納する。キッチンから良い匂いを漂わせていたビーフシチューも忘れずに、小さな鍋に移して貰ってきた。ここぞとばかりに胡椒や高価なスパイス類も失敬し、ウキウキと別邸へ向かう。

そうして、時間を掛けてたっぷりのご馳走を作り上げた。

上質の魔物肉は丁寧に包丁の背で叩いて筋切りをし、柔らかくした。塩胡椒とガーリックで味付けし、シンプルに焼いてミディアムレアのステーキに。付け合わせの野菜は砂糖とバターで甘めの

グラッセに仕上げた。

ずっと食べたかったポテトサラダはたくさん作る。手に入れた卵で手作りしたマヨネーズは良い出来だったと思う。それと、野菜をたくさん使ったポトフ。腸詰を見つけたので、ベーコンと一緒に投入した。これも味付けは塩胡椒とガーリックのみ。シンプルだけど旨味がたっぷり染み出したスープになっている。

デザートはリンゴのコンポート。贅沢に砂糖をたっぷり使い、シナモンで香り付けした。

丁寧に切り分けたステーキは、美しい赤身がなんとも食欲をそそった。あむ、と咀嚼するとたっぷりの肉汁が口の中に広がる。美味しい。今まで食べたお肉の中でも断トツの旨さに震えた。脂身が少ないのに、噛むと口の中で蕩けるほどの柔らかさには感動しかない。

「なんの肉かな？【鑑定】。……魔獣、ブラックブルの肉。黒毛和牛に近い肉質――って、日本人に特化した鑑定結果ね。分かりやすくていいけど」

覚えておこう。今後出くわしたらどうにかして倒して、積極的に肉を確保したい。

「だってこの肉、ステーキも美味しいけど、薄くスライスしてすき焼きにしたら最高じゃない……？」

想像しただけで涎が垂れそうだ。ああ、でもこの世界には醤油がない。すき焼きのタレと焼肉のタレがこれほどまでに恋しくなるとは。

「はぁ……。醤油とお味噌、お米が恋しい。ん、グラッセも美味しい。やっぱり砂糖とバターは正義よね。ポトフも沁みるわ。旨味が凝縮されている。パリパリのウインナー最高……」

どれも美味しく作れたようで嬉しい。余った料理は深皿に移して収納した。これで、いつでも食

立ち読みサンプルはここまで

べることができる。リンゴのコンポートはこの世界で食べたスイーツの中では断トツに美味しかった。やはり菓子は砂糖をケチってはならない。

「温かいご飯はやっぱり美味しいな。今後も余裕があれば、なるべく自炊しようっと」

別邸のキッチンには立派な魔道オーブンが備え付けられているので、甘い焼き菓子も作り放題だ。上質な油を使って前世ぶりのポテトチップスや唐揚げ、フライ料理も作りたい。

だけど今はお腹がいっぱいだし、久々にお風呂を堪能したかった。せっかくあの使用人部屋を出られたのだ。

バスルームは寝室の隣にある。タイルを敷き詰めた床に置かれた、優雅な曲線を描く猫脚のバスタブ。適温のお湯が出せる魔道具を作動させて、義母自慢の薔薇の精油を数滴お湯に垂らし、ゆったりとお風呂を堪能した。【浄化魔法】で汚れは落としているが、元日本人としてお風呂は欠かせない。何より、疲れがとれるのだ。

たっぷりのお湯を贅沢に使い、石鹸の残り香を楽しみながら、お風呂上がりの果実水を飲む。もちろん冷蔵庫に似た魔道具を使って冷やしたものだ。

「快適すぎる。ここは天国……？」

魔道具の便利さを痛感した。絶対に、宝物庫の魔道具は根こそぎ持って行かなければ。

母が使っていたベッドにダイブして、大きく息を吸い込む。柔らかな香水の匂い。これは母の残り香だ。

涙が出そうなほど懐かしい幸せな記憶を思い出しながら、アリアは記憶を取り戻して以来の深い、